

道徳の資料開発と授業の研究

愛知教育大学教育学教室 霜 田 一 敏
安城市立高棚小学校 稲 垣 雄 二
安城市立東山中学校 水 野 達 彦
(昭和62年2月23日受理)

はじめに

1958年教育課程の改訂において、文部省が道徳教育を重視する立場から特設した「道徳の時間」は、その後の学習指導要領の改訂を重ねる中で強化されて、今30年を経過しようとしているが、十分な実践的成果をあげているとはいえない。道徳教育重視の掛け声は大きくなっているにも拘らず、この数年の教育の現場を見ると、非行や暴力、いじめや登校拒否、自殺にまで至る子どもたちが続出し、その対応に教師は苦慮しているのが実状である。臨時教育審議会の答申においては、この実状を克服するためにより一層の道徳教育重視の方針が打ち出され、教育課程全般に渡って道徳色が強められて改訂されようとしているが、果たして本当に実践の成果があがるのであろうか。

現実においては、学校における道徳教育の中核となるべき道徳の授業が、最も難しいと言われており、多くの教師が持てあましていとさえいえる。教師達は道徳を授業でどう教えたらよいかわからず、テレビの道徳の時間を見せたり、副読本を読解し、話し合わせたりして、最後に徳目を説話して終わっているという例も多い。小学校でいうならば、28の一つ一つの徳目を教えるのに都合のよい資料を使って理解させようとする、建前の授業になりがちである。子ども達はどう答えたらよいかははじめからわかっているのである。特に、愛知県のように道徳の資料が教科書のような形で与えられていると、どうしても資料を教える授業になり、形式化されてくる。この度の教育課程審議会の答申においては、道徳の副読本が一人ひとりに行きわたるように奨励するといっているが、愛知県の実状を見ると、このような画一的な資料では一人ひとりの心を育てたり、道徳的な

実践力を培うことはできないであろう。

1. 理論的背景と仮説

道徳の資料は、教科指導における教材のように価値を教え込むものであってはならない。資料を解釈して一定の答を出すものではなく、あくまでも考える為の資料が必要なのである。従って、道徳の授業では資料はありえても、教材はありえないのである。道徳の資料は、子どもが自分たちのあり方を見詰め、問い直すためにあるのである。

子どもの心に響き、互いに響き合い、豊かな心を育む道徳の授業を成立させるには、一人ひとりの心を打つ資料は確かに必要である。それは学級の子どもを知り尽くしている担任の教師でしかできない資料選択や発掘の仕事である。かつて岐阜県瑞浪市の教師が一人の盗癖のある子どもを何とか治したいという願いから、その子の心に響く資料をどう創ったらよいかを苦慮し、何か月もかかって自作した資料で授業を行い、参観者を感動させたことがあったが、私は道徳の授業の原点は、正にそこにあると思う。即ち、道徳で使う資料は、一人ひとりの子どもの実態に即して選択されたり、開発されたりしなければならないと考えている。

幸いにして、道徳は教科ではなく、定まった教材や資料があるわけではないから、教師が自作したり、開発したりできる自由がある。そこで私は、安城市の派遣研究生である稲垣雄二と水野達彦の共同研究者をえて、次のような資料開発の視点と授業立案の手立てを仮説として、小学校と中学校で実践的な検討を行った。(今回は、文章表現による資料に限定して検討した。)

(1) 資料開発の視点

資料開発の視点を小学生と中学生の発達段階に応じて、次の2つの視点に絞って取り上げた。

① 自分との関わりが持て、共感できる資料（小学校）

稲垣の学級担当が2年であるということもあって、子どもの生活や経験と関わりがあり、共感できる資料の開発を試みた。この観点から考えると、先ず子どもの生活そのものを取り上げることができる。学級で今何が問題になっているかを取り上げ資料化することもできるし、一人の子どもの悩みや問題を取り上げることができるであろう。いずれも直接的で具体的であるから、資料そのものを通して学級のあり方や自己のあり方を見直し、追究することが可能になる。更に、どの子どもたちも経験する悩みの心の葛藤、過ちや失敗を取り上げ、それをどう克服していくべきかを創作して物語にしたものを資料にすることもできるし、児童文学の中から、誰もが共感する優れた描写力のある作品を選択することもできる。そこで、子ども自身が資料を通して自己を見直すと共に、他人の心に共感してものの見方や価値観を広げ、生き方に響くような資料の開発を試みたのである。

② 自分の生き方を見詰められる資料（中学校）

中学校での道徳の究極のねらいは自らの生き方を自分で見いだしていける自律的な力をつけることである。また、道徳の時間に中学生が心を開いて本音で話合うことと、そのための資料を開発することが重要な課題である。

水野が担任している3年生は、人生の一つの岐路に直面し、進学や就職問題をめぐってどうしても自分のこれからの進路を考えなければならない時期にあり、問題意識も持っていることから、一人ひとりが自分の進路を本音で話合える資料を開発しようとした。この場合でも、今の勉強や部活での悩みや問題があるであろうし、学級のあり方や最上級生としての学校への提言もあるであろう。それらの日常の問題を踏まえた上で、進学の問題、特に自分の思うような進路が選べなかった時どうしたらよいのか、不本意な高校に進学した3人の赤裸々な姿を通して、理想と現実の狭間の中でどう生きていったらよいかを各人に考えさせる資料を開発した。

(2) 授業立案の手立て

以下のような手立てのもとに立案し、実践した。

① 子どもの実態把握

学級の子どもの実態を正しく把握しておくことがどのような授業を計画するにしても大切である。どのような魅力ある資料を用意しても、子どもの実態に合っていないければ、子どもの本音を掘り起こすことはできない。学級のA子やB男の心にどう響かせよう変えようとするのか、ねらいを具体的に明示し、そのねらいから資料が選ばれ、提示されなければならない。子どもの正しい実態把握は、絶えざる教師の日常の観察や日記、作文や対話等からとらえ、蓄積されたカルテづくりの中から生み出されてくるのである。

② 資料づくり

学級の子どもにとってどのような資料が必要かを考えて、上述した視点に立って開発されなければならない。低学年では、子どもの話や絵本の中から資料を見いだすことができる。また、教師が資料を創作する力量を持つことは極めて重要である。子どもの話や体験をヒントにして創作した資料は多くの共感をよぶ。その時必要なのは、教師の文章表現力であり、リアルな描写力である。

③ 座席表づくり

子どもの実態と資料を読んだ感想を座席表に記入することによって、学級の子どもたちの予想される反応の全体的な景色を見ることができる。一人ひとりがどう反応するかを具体的にチェックすることを通して、授業の構想や展開が自ずと立案されてくるのである。

④ 授業構想図づくり

座席表を足場に、予想される一人ひとりの考えや反応を検討し、関連付け、授業の全体計画を授業構想図として一度描いてみるのが大切である。そうすると、どの子どもの考えをどこで生かしていくかの展望が持てるようになると同時に、複線的な授業の展開案を描くことができ、ゆとりを持って授業に臨むことができるようになる。

⑤ 指導案の作成

授業構想図を踏まえるならば、授業案は自ずとねらいや展開の中に学級の子どもの名前が書き込まれてくる。その学級のその教師の固有のものがあってこそ道徳の真の指導案たりうるのである。

(霜田一敏)

2. 小学校における実践的検討

5月から12月にわたる実践を以下に掲げる4例を基に検討していきたい。

(1) 「ぬれたボール」の実践的検討

① 子どもの実態把握

2年生の子どもたちは、まだ自分の体験や気持ちをことばで満足に表現できない。そこで、実態をとらえるには行動から把握した方がよいと考えて、以下の方法を取った。

ア) 給食の時間(班ごとで食べている)に、教師も児童用の机と腰掛けを並べ、いっしょに食べた。
 イ) あまり外で遊ばない子、少人数で運動場のすみで遊んでいる子たちといっしょになって遊んだ。
 ウ) 掃除の時間は、班の中の人間関係をつかもうとして、あまりあちらこちらの掃除区域を見に行かないで、1つの班といっしょに掃除をした。

それぞれの機会です得られた子どもたちの様子を合わせ、個人カルテを作った。

② 資料づくり

5月になり、クラスのドッジボールが行方不明になることが2日続いた。2回とも運動場の隅の溝に入っていたが、誰かが片付けなかったか分からなかった。給食の時間に聞いてみたところ、チャイムが鳴った時ボールを持っていた子が、誰かにそのボールをぶつけて逃げることや、ボールをぶつけられた子が、次の時間には仕返しに別の子にぶつけていることが分かった。このような子どもたちの問題を取り上げ、次のような資料を創った。

みんなが楽しくドッジボールをしていた。りょうじが力いっぱい投げたら、ボールは運動場の隅へ転がって行ってしまった。その時チャイムが鳴り、りょうじはそのままにして行ってしまった。それを見ていたしんいちには取りに行こうか迷ったが、次の放課に取りに行けばよいと思い、教室へ行ってしまったが、しんいちには取りに行くことを忘れてしまう。次の日思い出したしんいちは、あわてて取りに行ったが、ボールは雨に濡れていた。

③ 授業

子どもたちの好きな遊びを発表させ、導入にした。次に迷った時のしんいちの気持ちを考えさせた。話し合いは、すぐに自分だったらどうするかという問題になり、次の放課に取りに行くという

意見と、チャイムが鳴っても取りに行くべきだという意見に分かれた。そして、後者の方がよいという意見が多くなり、各自の同じような体験が開始された。

…………… 授業記録より ……………

理絵61 高小の森でね、手でボールをついていたらね、そしたら、隅のどぶに入っちゃった。

T それからどうしたの。

理絵62 それでね、みんな仲よく遊んでいてね、それでね、私取りに行った。

T その時の気持ちはどうだった。

理絵63 ボールが使えなくなると嫌だと思って。

徳明64 僕がね、政禎君とね、遊んでいる時ね、政禎君が先に出してね、それからね、チャイムが鳴って政禎君がボールを片付けなかったからね、僕がね、嫌だと思ったんだけどね、片付けた。

領助65 最初、僕と元希君がサッカーボールで遊んでいてね、僕が飛びすぎて、それで、学校の外へ出て行っちゃってね、僕が取りに行った。

…………… 〈中略〉 ……………

勝78 ドッジボールをやってチャイムが鳴って終わったら、誰かは片付けたくないから、僕に当ててきた。そのまま逃げて行ってね、それでも、僕も片付けなくなかったけれどね、最後に片付けた。

……………

授業の終わりに教師の体験(ボールを片付けることを忘れ、暗くなってから懐中電灯をつけて探した)を話した。

④ 実践的検討と問題点

授業が終わってからのノートには次のように書いてあった。

— とうとくノートより —

一弥 私はこれからボールがどぶに遊んでも、拾って片付けるようにがんばるようにします。
 誠一 僕は、1回やっちゃったけど、みんなに迷惑をしてみました。

一弥は、授業では取りに行かなかったと、体験を発表していたが、考えが寛容している。誠一はノートからも分かるように自分のしたことを素直に反省している。ノートに、自分の体験を反省したり、これからどうするかなど、自分の問題とし

て考えて書いていた子どもは26名中21名いた。

この授業では、資料で考える段階から、自分の問題として考える段階へは到達できた。しかし、この問題は教師から考えれば重大な問題であるが、子どもたちにとっては、それほど切実な問題ではなかったのではないかと反省した。

本実践では、教師の一方的な考えで、子どもたちの問題を大人の問題にすり替えて、資料化してしまったのではないかも考えた。

(2) 「るすばん」の実践の検討

① 子どもの実態把握

5月から、朝の会での「日直の話」の仕方を段階的に指導した。

ア) 日直(2人ずつ)が話す時、句点ごとに一つずつ花の形をした磁石を黒板にはった。

イ) 日直の話の後に、その話の中から教師が問題を作り、聞いている子どもたちに質問した。

ウ) 日直クイズを3週間ほど続け、その後は子どもたちが自由に質問できる「おたずねコーナー」に変えた。その時、どうしても発言できない子どもがでてしまうので、質問する班を決めておいて、その班の子どもが全員発言してから、後は自由に質問できるようにした。

エ) はじめ話題は自由にしておいたが、少しずつうれしかったこと、悲しかったことなど心に残っていることに変えて行った。

このように段階的に指導したのは、第一に、話し合いに慣れさせることであった。次のねらいは、自分の気持ちを素直に言えるようにさせることであった。また、ある一人の子の体験や考えに、他の子どもたちがどのように反応するかも見たいと考えた。そうすることによって、子どもたちの問題意識を探ることができるのではないかと思った。

② 資料づくり

6月になり、子どもたちの遊びが活発になった。しかし、その他のことでは、教師の指示がなければ、しないことが気になってきた。窓の開閉や、植物の世話など、ちょっとしたことでも、自分たちで考えてすることができなかつた。もう少し自主的にできないものかと考えていたところ、ある朝の会で勝が一人ですばんをしていて、急に雨が降ってきて自分で洗濯物を取り入れた話をした。

他の子どもたちも、この話には大変興味を持ち、自分の体験を話してくれた。

そこで、勝の話を基に次のような資料を創った。ひでおが一人ですばんをしていたら急に雨が降って来た。ひでおは、洗濯物が干してあったことに気づき、あわてて取りに行った。しかし、洗濯物に手が届かなかったので、跳びついたり台に乗ったりして、やっと取ることができたが、転んで洗濯物を泥だらけにしてしまった。帰って来た母親は、ひでおにわけを聞いてほめた。

失敗をしないようにと考えがちな子どもたちに、結果より自分で工夫することが大切であることを分かってもらいたいというねらいで資料を創った。

③ 授業

はじめに、ひでお君が取った行動を発表させ、その時の気持ちを考えさせた。次に、その結果洗濯物が汚れてしまったことの是非を考えさせた。終わりに、子どもたちの同じような経験を発表させ検討した。

④ 実践の検討と問題点

授業の終わりに書いたノートを見ると、ひでお君は諦めずにがんばったからえらいと、書いている子どもが一番多かった。次に多かったのは、自分の体験や、自分だったらどうするかを書いていた子どもたちであった。

しかし、教師が考えていた、自分の置かれた状況の中で自分なりに考えることの大切さについて、書いていた子どもは7名(次のノートはその中の2名)だけであった。

—— どうとくノートより ——

徳子 ひでお君はやれることを全部やったからえらい。雨が降って来て、洗濯物が干してあったことを思い出したところがよかった。雨が強くなっても、諦めずにやった。
正行 ひでお君は転んでもくじけないでやったのがえらかった。ひでお君は届かないので、シャンプーしたり考えたところがよかったです。

それは、資料では洗濯物を泥だらけにしても、母親にほめられたという終わり方にしたので、資料に限定されて、子どもたちはすべてを肯定的に考えてしまったと思われる。実際の子どもたちの

生活においては、失敗すれば、大人に「よけいなことをして」と、怒られるのが普通であろう。最後をおかあさんに叱られるにすれば、子どもたちももっと共感することができたと思う。

資料を作成するときに、大人批判になってはいけないと思って、ほめられるという終わり方にしてしまったが、結局教師の考えている理想の子ども像、理想の母親像を押しつけることになってしまったようである。

(3) 絵本「がまんだ がまんだ うんちっち」の実践の検討

① 資料について

5, 6月と自作資料を創ってきたが、展開のおもしろさや物語性が欠けていた。それは、私の力不足で、どうしても教師の価値観が先行してしまい、あらすじだけの物語になっていた。そこで、霜田に助言をうけ絵本（「がまんだ がまんだ うんちっち」梅田俊作／佳子／海緒 作・絵 1981年岩崎書店）を使うことにした。

そのあらすじは次のようである。主人公のみお君は、学校の帰り道うんちがしたくなった。そこで、同じクラスのよねだ君の家、ケーキ屋さん、すし屋のおじさんの家、スーパーマーケットなど次から次へと考えられるだけのトイレに行ってみる。しかし、すべて使えなくてとうとう最後に駐車場ですべて話である。

うんちというだけでも、子どもたちの興味を引くだろうし、次から次へとトイレを借りようとする物語の展開にわくわくするだろうと考えた。また、子どもたちはこのような経験も多いから、主人公の気持ちになって考えやすいと思い、資料を選んだ。

② 授業

少し文章が長いので、教師がゆっくり読んだ。一度読んだだけであったが、子どもたちは物語の内容をつかむことができた。話し合いはすぐに自分だったらどうするかになり、各自の体験も多く出された。話し合いは活発に行われ、チャイムが鳴っても授業が続いた。

③ 実践の検討と問題点

教師の意図としては、「よく考えた」ということに気づいてほしかったのであるが、結果とし

ては次の集計のように「がまんしてえらい」が一番多くなってしまった。授業の終わりに「がまんしたからえらい」のか、「いろいろ考えたのがよかった」のか、話し合いをさせれば、もっとこの本を生かせることができたと思う。

しかし、絵本には自作資料では感じることでできない楽しさがあるので、これからも授業に使って行く価値は十分にあると思った。

—— とうとくノートより ——

みお君ががまんしてえらい	11名
みお君によい方法を教える	12名
自分の経験を書いたもの	4名
みお君はよく考えたからえらい	3名
(26名のクラスで、重複がある)	

(4) 「おりがみ」の実践の検討

① 子どもの実態把握

2学期になり、子どもたちに書くことに対する抵抗感がなくなってきたので、「あのねノート」を書かせることにした。

② 資料づくり

「あのねノート」に、教師も知らなかった面を発見するようになった。大介は、学校ではみんなから乱暴者だと言われていた。しかし、家では弟たちのめんどうをよく見ていて、母親が大変助かって（父親が10月から入院）いることが分かった。理絵も、女の子の間では、わがままと言われていた。家では自分から進んでお手伝いをし、遊び相手のいない二人の妹の相手をしていた。

子どもたちは友達を目立つところしか見ないで、その子の性格を決めていることが多い。そのような見方は、本人だけでなく、ある一面だけ見ている子にとっても不幸であり、そのような見方が、大きくなって偏見や差別にもつながるのではないかと思う。

低学年においては、誰にでもよいところがあり、自分のよいところを見つけ、伸ばそうとする気持ちを養うことが大切だと思う。

そこで、2週間ほど前、ありがとう集会（児童会の集会）のために、グループで折り紙を折った時、意外な子どもがうまく折ってみんなが驚いていたことをヒントに、次の資料を自作した。

おりがみ

ひろの ほうか よしおくんが 教室に 行くと、こういちくんが ひとりで おりがみをおつて いました。よしおくんが、「こういちくん、何をしているの。」と きくと、こういちくんは、「うん、千ばづるをおつているの。」と、答えました。よしおくんは、ふしぎに 思いました。ドッジボールが だいすきな こういちくんが こんな いいてんきに へやに いたからです。よしおくんは、「どうして、ドッジボールしないの。」と ききました。こういちくんは、ちよつと かんがえてから、「あのね、さだおくんが もう三日も 学校 やすんでいるだろう。千ばづるを おると はやく なおると きいたから、おつているんだ。」と 答えました。

それを きいて、よしおくんは おどろきました。こういちくんは、うんどうは とくい だけど、ちよつとしたことで 口げんかを したり、ふざけたり する。だから、みんなから らんぼうものだと いわれ、ちよつと きらわれて いるのです。いちばんよく なかされて いたのが、さだおくん だったのです。よしおくんは、いっしょうけんめいに おりがみを おつている。こういちくんを じつと 見ていました。

そこへ、クラスのみんなが 入ってきました。よしおくんは、みんなにわけを 話しました。

「こういちくんって、やさしいところがあるね。」

「いままで ぜんぜん しらなかつた。」

「ぼくも いっしょにおるよ。」

と いって、クラスのみんなは おりがみを おりはじめました。よしおくんも、こういちくんって いいところが あるなと 思つて、

「今まで、ちよつと きらつていて ごめんね。」

と いって、おりがみを おりはじめました。

こういちくんは、とても うれしそうでした。

③ 授業

授業の後半で、ペープサートを使い資料の終わりのふたりの気持ちを対比して考えさせた。そして、母親からの手紙(家での子どものよいところが書いてある)を読んで授業を終わった。

④ 授業の検討と問題点

下に掲げるノートに見られるように、教師が考えていた願いは達成できたと思う。特に、大介は自分の今までの行為を反省し、「自分にもいいところがある」と、素直に自分のよさに気がついている。また、おかあさんの手紙の内容(授業後遊ばない子どもたちは、お互い学校で見ている姿しか知らない)が子どもたちを驚かせ、多くの子どもたちの心をゆさぶったのではないかと考える。また、考えさせるための資料と、一般化させるための資料(母親の手紙も自作資料といえるのではないか)の2つの自作資料の関連的な提示が有効であったのではないかと思う。

———どうとくノート———

大介 僕もこういち君と同じです。すぐ友達をいじめてしまいます。でも、いいところがあるとします。おかあさんの手紙に書いてありました。

理絵 保育園の時、一番いじめられていたのに、今は一番いじている。ともちゃんが休んで心配でもういじめるのをやめよう。

(5) 四つの授業の考察

道徳の授業における子どもの思考を考えると、

ア) 主人公の気持ちになって考える。

イ) 自分の今までの行動、体験を考え直す。

ウ) 主題について考える。

という段階をたどると思われる。

自作資料を使うと、ア、イの段階に到達しやすいと思う。それは、資料の中の物語の背景や、出来事、語句が子どもたちに馴染み深く、子どもたちの思考を妨げる要因が少ないからである。また、子どもたちの体験に基づいて創るので、例えそれが一人の体験であっても、同じような環境の中にいる他の子どもたちの心にひびきやすいのである。

また、自分で資料を創ることによって、子どもたちの実態がより分るようになり、それによってよりよい資料を創ることができるようになる。

即ち、資料と実態把握の循環的(相互的)深化が可能になると思う。

(稲垣雄二)

3. 中学校における実践的検討 -自分の生き方を見つめられる資料づくりを中心に-

(1) 生徒一人ひとりの心を把握する

中学3年は、多くの場合初めての進路選択を迫られる学年である。適切な進路指導を行うためには、生徒一人ひとりに対する確かな認識を持たねばならない。さらに、自分の生き方を冷静に見つめる目と、どんな困難にもまけない精神力を育てなければならない。

私は、早急に生徒の心を把握したいと考え、個別に話し合う機会を多くし、さらに生徒一人ひとりに「私の記録」を持たせ、折にふれて自分の心の様子を記録させた。生徒と私の交換日記である。4月当初は、「A君はあいさつをしてもそっぽをむいている。おこれる」といった直情的なものが多かったが、丹念に朱筆を入れ、より深い思考へと導くように心がけさせた結果、しだいに自分の生き方や、もっと具体的な進路にかかわる悩みが中心となってきた。

さて、そうした手だてを構じる中で浮きぼりにされてきた生徒の様子をまとめてみると、

- ① 厳しい現実や困難な問題にぶつかると、逃避的になる傾向が、特に女子において顕著である。
- ② 女子の小グループ化が目立ち、さらにその相互のいがみ合いが顕著である。お互いの心を素直にみつめ、その個性を認めることができない。という2つの問題点が明らかになった。

②の問題については、5月ごろから顕著になってきた。再三の個別指導や学級会での話し合いにもかかわらず、彼女らはお互いを理解しようとしなかった。以前から多少の問題行動を起こしている淑恵や裕子を中心としたグループに対して、他のグループがおそれを抱いていたのである。しかし、裕子は5月に問題行動を起こし、指導をうけて以来、精一杯立ち直ろうと努力していたのである。裕子の「私の記録」には、

・私は絶対に立ち直ってみせる。両親や先生にあれだけの迷惑をかけながら、立ち直れなかったら、救いがなくなってしまう。でも、一番たまらないのは、私たちを見るクラスの友だちの目だ。そりゃあ前はこわかったかもしれないけれど、せっかく立ち直ろうとしているのに、私が

話しかけても、こわそうな顔をする。もっと今の私をわかってほしい。

と正直な心が記された。

私は、前期の副級長である里美と会計である忍と何度も話し合いの機会を持って、女子の心を一つにしようとしたが、結局里美はあきらめ、忍は持ちまへの個人主義を唱え、解決は2学期へと持ち越された。

9月末、後期の役員選出の学級会において、以前1年間の登校拒否を続けた経験のある恵子が、副級長に推された。私は、この学級を担任して以来、この恵子の心の動きを一番注意してきた。確かに彼女は、以前に比べはるかに明るく前向きになってきてはいたが、登校拒否に陥るきっかけの一つが彼女の係活動における挫折であったらしいという過去のデータを考えた時、私は決して安直に、この決定を受け入れられないと思った。しかし、彼女は意外にもすんなりとそれを引き受け、過去と全く無縁であるかのような活躍を始めたのである。

それは、11月18日に行われる合唱コンクールへの取り組みの中で始まった。10月14日のことである。女子の心が一つになりきれないから歌が歌えないという問題提起から始まった学級会の席上、恵子はなりふりかまわず、淑恵を中心としたグループの日頃の生活態度を責めた。それが改まればみんなも認めてくれるはずだというのである。それをきっかけにせきをきったように、女子の本音がぶつかり合った。裕子や紀代は、「2年生の時の私たちではない。それなのに今だに同じようにへんな目でみられることが耐えられない」と訴えた。それに対して、恵子を中心に大半の生徒は、「本当に2年生の頃とちがっているのか。朝の学習中に騒いだり、答をまるうつししていたりしては、だれも認めてくれるはずはない」と、つぶねたのだ。

そんな熱い話し合いの中で、ふだんは口数も少ない由佳が、おそろおそろ手を挙げて、こうつぶやいたのである。「私も今まで何も言えなかったからいけなかったと思うけど、小学校時代あんなにもやさしかった紀代ちゃんが、あんまりにも変わっちゃって、ほんとうにさみしかったよ」

由佳の涙を流しながらのこのことばに、教室は静まりかえった。そして、紀代と裕子が黙ってうつむき、やはり涙を流し始めたのである。

この日から、女子の小グループは少しずつ解体し始めた。恵子は、裕子や紀代、そして理恵の今までの苦しみを理解しようと飛びまわった。そして、彼女らも少しずつ恵子や私に対して心を聞き始めたのである。10日ほどたって行われた学級話し方大会でも、紀代と裕子は、この日のことを中心に、自らの生活態度や考え方の甘さを省みた意見文を発表し、熱い拍手を浴びた。

合唱コンクールの練習も熱を帯び、11月14日の大会では、戦争の悲惨さを訴える「木琴」（金井直作詞）を、クラスの大半の生徒が涙を流しながら歌うという感動的なシーンもみられた。

こうしたムードの反面、進路指導は計画的にすすめられ、①のような傾向が浮きぼりにされてきたことも事実である。学級のムードは最高潮でありながら、一人ひとりの心には、具体的な進路決定が近づき、不安がうずまいているのである。

テストが近づくと過呼吸に陥り、中間テストをうけられなかった良枝を筆頭に、学力低下が著しく捨てばちになりかけている奈美や真弓など、現在よりもむしろ、高校へ進学してから、その現実の中で逃避的になりそうな生徒が多い。

特に、地域の特徴から、近距離の公立高校ということで、農業を営まない家庭の生徒が、農業科を中心とした職業科の高校へ進学するケースの多い本校では、目的意識のない進路選択にならぬような配慮が必要である。

大学へ進学したいと考えながらも、諸般の事情から職業科の高校へ進学して、結局就職してしまうであろう生徒、自分の能力を考え、希望校に入ってから学習面でついていけないかということばかり不安がって、勉強に手のつかぬ生徒、勉強が嫌いだからという理由で安易に調理師学校を志願する生徒。こうしてさまざまな生徒を見ていると、彼らがいかに自分の生き方を見つめていないかがわかるのである。

そこで私は、高校に入ってから問題にぶつかる生徒の姿を描くことにより、生徒一人ひとりが自分の生き方を見つめ直すきっかけがつかめれば、

と考えた。そして、合唱コンクールへの取り組みの中で経験したこと、考えたことを再度確認しながら、生きる強さの獲得への意欲をかりたてたいと考えた。

(2) 資料づくりの方法

まず、私が考えたことは、生徒が進学してからどんな問題にぶつかるであろうか、という点である。そこで、卒業生を招き、彼らが直面した問題について直接聞きだした。

まず、工業系の高校に進学した正樹は、

・A高は無理と考えた時点で、大学への進学をあきらめて、今の高校に入ったが、6月ごろにはずいぶん後悔した。何にも勉強しなかつたってトップに近い成績はとれるし、何か力が入らなかつたね。

そして、そのA高に進んだ真知子は、

・私みたいな性格では合わない所ってことが入ってからよくわかった。でも勉強ばかりが高校生活じゃないって悟ってからは気楽になった。部活（プラス部）のために学校へ行ってるって感じかな。将来？一応音楽系の大学を受験するけど、すべったら北海道へ行って、尊敬する倉本聰さんの所へ弟子入りを頼むつもり。

また、ぎりぎりの成績でA高に入った克巳は、

・中学時代に自分の性格を考えて、M高へすすんだらきっと甘えてしまうから、ぎりぎりでもA高にすすんではい上がってやろうと思ったけれど、現実には厳しいね。10人抜くのだから死にも狂い。そのうち勉強やることに疑問を感じ始めちゃって、ふねけになった。

さらに、T農業高校へ入学した省一は、

・農業高校へ入ってトップでいれば、兄貴みたいに推薦でS大の農学部に行けると思っていたけど甘かった。推薦もずいぶん厳しくなってきたからね。

以上のような調査をもとに、生徒たちが最も関心を持ち、切実に感じることができると考えられるケースはどれだろうと考えた。そして、これらの卒業生の話を多少アレンジして、資料を作成した。その資料は「半年後の悩み」と題し、正樹と克巳の話、さらに調理師学校にすすみ、技能面では優秀だが、理論面の学習についていけない信吾の話、オム

ニバス形式で綴ったものである。この資料をもとに、まず生徒の実態を把握するためである。

生徒にこの3部作の資料を読ませ、自分が最も共感できるものを選ばせて、感想を書かせた。その結果は実に明確に表れた。普通科への進学を希望している者のほとんどが、克巳のケースを取り上げ、職業科を志願している者は、正樹のケースを、各種専修学校への進学希望者は、信吾のケースを選んで、それぞれ感想を書いているのである。

つまり、生徒たちは、自分の希望がかなうことを想定しているのである。しかし、現実には厳しい。必ずしも希望どおりの進路がとれない場合が多い。そうした状況に陥った時にこそ、耐えぬいて前向きに生きることのできる生徒を育てるのが、私たちの使命である。

そこで、私は、今度は省一の話をもヒントにして、大学進学を希望しながらも、家庭の事情で農業高校にすすまざるをえなかった主人公を中心に、主人公とはちがった生き方を持つ2人の人物をからめることにより、主人公が自分の生き方を見つめなおすといった筋の資料づくりにかかった。

そして、霜田との二度にわたる検討をもとに、完成させた。全文を紹介したいが、長すぎるのでここには資料内容の概要を紹介するにとどめる。

(3) 資料「K農業高校に入学して」概要

普通科の高校に進学し、大学まですすみたいと考えていた主人公前原祐一は、父の突然の入院のため、経済的な理由から近隣のK農業高校畜産科に入学せざるをえなかった。父さんさえあんなことにならなければ、というくやしさを感じたが、高校に入ったら、むだを省いて勉強して大学に行こうと決意していた。

しかし、入学後すぐに、彼は担任からクラス代表委員に指名される。冗談じゃない、ぼくにそんな力はないと言って拒否したが、女子で指名された戸谷和美が、すんなりと引き受けてしまったので、バツが悪くなり、結局腹をくくって引き受ける。

祐一はその日の放課後、和美を引きとめ、仕事の分担を提案する。司会や仕事の運営は自分がやるから、畜舎の管理を和美にまかせるというのだ。畜舎の管理は、毎日の仕事で、しかもずいぶん骨

の折れる仕事だとわかっていたからである。それでも和美は簡単に承諾してくれた。

それ以後、祐一は一番に校門を出て、午前2時まで勉強をし、テストでも学級2位をとり、すべてが順調にすすんでいた。ところが、この頃から祐一は、志賀雅夫という級友が心にひっかかるようになる。雅夫は成績が学級1位、友だちもつくり、授業中も別の参考書をひらいている。そして、悪びれもしないのだ。どうも農大への推薦をもらうために、がむしゃらになっているらしい。祐一は同じような気持ちをもちながらも、そこまで徹底する度胸がない。そして、雅夫をみる度にいらだちがましていく。

さて、文化祭が近づき、畜産科では乳製品を使った食品バザーの模擬店をひらくことになった。祐一は、めんどうなことは避けたかったが、和美との約束もあるので、中心的に事を進めた。ところが、模擬店をひらくためにクラス全員の検便が必要なのに、雅夫だけが出さないのである。祐一は雅夫を問いつめるが、雅夫は、「いやだね。ぼくは反対したのに、多数決できただけのことじゃないか。しっかり話し合いもせず」と一蹴する。祐一は頭に血がのぼり、雅夫をなじるが、「ぼくにはぼくの人生がある。それを変える権利が君にあるのか」と言われ、頭をひとつガツンとなぐられたような気持ちになり、何も言いかえせなくなる。それは、雅夫のことばに、自分と共通する何かを感じとったからである。

打ちひしがれて、畜舎に足をむけると、もう暗くなりかかったそこに和美がいた。祐一に気づいた和美は、子ぶたを抱いてほほえみかけた。そして、祐一は和美と話す中で、和美の境遇が自分に似ていることを知るのである。母親を失い、家事をまかなうために一番近いこの学校へ入学したこと、そして保母になりたかったということ。祐一は、和美がその夢をどう考えているのかを聞いてみた。すると、和美は「人の子を育てるのも大切だけれど、動物を育てることも同じじゃないかと思えるようになってきた」と語る。そして、「みんないい人たちだし、この学校へ来てよかった」と言うのである。そんな和美の考えに驚いていると、和美に子ぶたをさし出され、「ほら、あった

かいでしょ。」とわたされる。祐一は、その温みを感じながらも、自分一人が中途半端な立場で、ぶざまにぶらさがっているような気がして目をふせた。

(4) 資料の有効性

さて、この資料を作成しながら、私は、次の4点が、論点となるであろうと予想した。

- ・論点④……祐一がK農業高校畜産科に入学せざるをえなかった状況
- ・論点⑤……クラス代表委員になり、和美に仕事の分担を提案した点
- ・論点⑥……雅夫のことばに何も言いかえさせなかった点
- ・論点⑦……和美の生き方にもふれ、自分が中途半端な立場にぶざまにぶらさがっているように感じた点

そして、この論点⑦において、生徒の本音を引き出し、生活を見つめなおすことができると考えた。

(5) 座席表づくり

この資料については、2時間扱いとした。第1時は、資料の筋立てに準じた資料読みを深め、主人公の心情や行動から、主人公のもの見方、考え方をとらえさせた。さらに、雅夫や和美の生き方にも着目させ、初発の感想をまとめさせた。そして、論点⑦について、「中途半端な立場でぶざまにぶらさがっている自分を感じたことはないか」という問題を投げかけ、生活化への足がかりを持たせた。この第1時の感想をもとに、座席表を作成した。

座席表の抜粋

↗	山田 里美	↖	田中 清一
	勉強一すじか学級のこと に懸命になるか、どちら かひとつにしばれなかつ たから中途半端と感じた のだ。 雅夫のように自分の生き る道に一直線に向かって いくことは大切だが、や っぱりやりすぎ。		和美や雅夫にくらべて、 将来のことにつきすすん だり、クラスのためにが んばったり、その両方に 対して中途半端。 雅夫のことばに自分の心 に似ている部分があるこ とに気づき、雅夫のよう になりきれない自分をみ つめている。

総合的な生活ぶり、心の様子

座席表については、授業を構造化するには、たいへん有用であるが、あまりこれを過信すると、授業の流れの中で変容する生徒の心の動きをつか

みそこなう危険性もある。

この座席表を作成し、生徒の感想を整理してみると、次のようにまとめられた。

- ・論点④について
かわいそうだとする同情論がほとんど。
- ・論点⑤について
 - ① 自分のことを中心にして、他人にいやなことをまかせるのは許せない。(63%)
 - ② 決してよいことではないが、事情が事情だけに許すべきだ。(12%)
- ・論点⑥について
主人公の心に雅夫と同じような気持ちがあることに気づいたからだ、と理解できた者(93%)
- ・論点⑦について
 - ① 中途半端な自分について、合唱コンクールの取り組みの中で見つめなおした者(12%)
 - ② 学習や進路に関する中で(51%)
 - ③ 友人関係の中で(33%)

この中で、里美が恵子の積極的な取り組みを和美になぞらえ、自分を主人公に見たてて、自己を省みている点が注目された。さらに、学級内に7名いる母子家庭の生徒がすべて主人公に同情的であった点も見逃せない。

(6) 指導案の作成

座席表をもとに、授業を構造化し、第2時の指導案の作成にとりかかった。

指導過程については、次のような手順を想定した。

- ① 主人公のもの見方・考え方を追っていった最後に考えたいところ(共通問題意識)を確認し合う。
- ② 論点を確認する。
- ③ 論点にそって、話し合いをすすめる。(主人公の生き方を追究する。)
- ④ 共通問題意識を解決させる。
- ⑤ それを生徒一人ひとりの心を見つめ直すために生活化する。
- ⑥ 和美や雅夫の生き方について話し合う。
- ⑦ 3人のうちでだれが一番前向きに生きているかについて話し合う。
- ⑧ サトウハチローの詩「美しく自分を染めあげて下さい」を読ませる。

私は、⑤と⑦において生徒をゆさぶることができると考えた。生徒の心をゆさぶる場がなければ、生徒の本音は引き出せないし、実践力への高まりも期待できないからである。

⑦においては、指導者が和美の生き方を一番と決めつけることのないよう配慮した。そして、中途半端な自分を知り、とまどっている主人公だって、精一杯生きていくという点にまで気づかせることが大切であると考えた。

(7) 授業の実際

前半、主人公が和美に仕事の分担を提案する場面について話し合った時、私は少ない弁論論に肩入れし、批判論をゆさぶった。しかし、論点にそった話し合いはどこまでもたてまえが先行する。

この授業の核になるのは、「中途半端な立場でぶざまにぶらさがっている自分を感じたことはないか」という問題を投げかけ、生徒一人ひとりが自らの生き方を見直す場面である。私の問いかけに8名の生徒が挙手し、発言した。

・里美

私は合唱コンクールの練習についての話し合いなどの中で、恵子ちゃんがみんなの心を一つにするために、すごくがんばっているのを見て、感動した。前期副級長だった私は、結局あきらめてしまったから、恵子ちゃんとくらべると、中途半端だったと思う。

・保子

私は会計で、恵子ちゃんがあんなにがんばっているんだから協力しなくちゃいけない立場なのに、何にもできずに終わってしまった。

・重夫

2年生の頃、ばかになりきれず、かっこうつけてばかりいて、今考えると中途半端な態度だった。

・忍

自分の進路だから自分でちゃんと考えて勉強しなきゃいけないのに、何となく中途半端で、不安ばかりが頭にあって、やるべき時に勉強に手がつかない。

私は、里美と保子の話をうけて、恵子に問いかけた。「みんなは君をあんなふうに見てるんだけど、君は中途半端な自分を感じたことはないの。」

・恵子

あるよ。あの時だって、ほんとうにやれるのになってずいぶん思ったし、つらくてだれに相談していいかわからなかった。

この時、保子が一瞬目をみはり、寂しそうな表情になったのが、私にはわかった。保子は、「何もできずに終わった」と述べたが、それはあまりにも謙虚な発言であった。彼女は、恵子とともに精一杯学級づくりに取り組んできた子である。

保子が寂しげな表情をしたのは、恵子の「だれに相談していいかわからなかった」という発言を聞き、恵子にとって自分がその程度の存在だったのかという悲しみがわいたからである。授業が終わったら、保子としっかり話をしなくてはいけないと思った。

さて、こうして個々の生徒が自分の中途半端さを確認したうえで、私はもう一つのゆさぶりをかけた。「8人のうち、だれが一番前向きに生きていくか」という発問である。

座席表からは、「和美」と答える者がほとんどだと予想されたが、授業の中では「雅夫」と答える者が多くでた。そのほとんどが男子で、しかも彼らは「雅夫」に近い考え方をふだんから見せている生徒である。彼らはなぜ、「雅夫」を肯定したか。それは指導者である私や今の話し合いのムードが、「雅夫」のような生き方を決して肯定していないことに対する反発と自己防衛からの本音であると、私はとらえた。

最後に、「和美だ」「雅夫だ」という討論の中へ、私は由佳の意見を投げかけさせることにした。座席表によれば、由佳は「和美も雅夫も精一杯生きている」という意見を持っていたからである。ところが、由佳が発言した内容は次のとおりであった。

・私は8人とも真剣に生きていくと思う。8人ともそれぞれがった生き方をしているけれど、結局はいきつく先が必ずあるのだから。

この発言のあと、一瞬教室が息をのむように静まりかえった。ついで、ばらばらと拍手がなり、「すごい」という感嘆のことばも聞こえた。私もこのことばに驚き、とまどった。ことば足らずの感はあるものの、祐一の生き方を肯定する意見が生徒の中から出てくるとは予想しなかったからだ。

8か月ほど前に父親を不慮の事故で亡くし、その葬儀の席上で、まだ本当の悲しみがわからず、ほほえんでいたという由佳。それから半年余りの間に、思慮深さを備え、先の学級会では、紀代の心をゆさぶる発言をし、今回も授業に真剣に取り組み、自分なりの結論を出していく由佳に、大きな成長の跡をみることができた。

私にとってこの授業は、生涯忘れがたいものになるであろうと思った。ここには書ききれなかったが、一人ひとりがよく考え、本音で語り合ってくれた。48名中88名が発言をし、私の不十分な資料から、生徒は必死で生きることについて考えてくれた。そして、教師の授業に対する構えが、そうした生徒の心をうけとめるだけの余裕と柔軟性を持たず、中途半端であったことを感じずにはいられなかった。

(8) 授業後の生徒の姿

授業後の「私の記録」には、授業中には言いきれなかった生徒の迷いがひしめきあっていた。

まず、早苗は、進路に対するあいまいな自分の姿勢がこわい。このままだと友だちがいくからという理由だけで高校へ入ってしまいそうだと、SOSを発信してきた。また、母親が入院中であった忍は、他人事とは思えないからこそ不安になったと訴え、自分は和美のように生きられないだろうが、できることならそう生きたいと綴った。

また、保子は、やはり恵子の発言にずいぶん心を痛めたいが、私が、「保ちゃん、このことでまた一つ考えが大人になったと思えないかな」と言ったら、「そうかもね」と笑ってうなずいた。

私は、だんだんと自分の生き方を深く、また真しに見つめられるようになってきた生徒を前に、多少のとまどいを感じつつも、新たな問題をとらえ、もう一度自作資料を開発し、授業実践をしたいと思い始めている。

特に、精一杯努力しながらも成績が低下し、進路のとり方が思いどおりにならない早苗が、涙を流しながら私に相談にきたという事実、そして飛躍的な成績の上昇を続けている登が、文集委員でありながらその責任を全く果たさず、他の生徒の反発を買っているという事実などを考えた時、もう一度別の角度から、真の生き方とは何かという

問いかけをすべきだと考えている。

(9) 今後の課題

自作資料を今年度だけで5作つくったことになる。1作目は、就職に対する考えの甘さをとらえ、就職して、あと8か月たてば店をまかせられるのに同級生のことばに影響され、店をやめてしまうという話を書いた。2作目は、部活動のまとめともいえる支所予選を前に、じっくりしない気持ちをとらえ、2年生に正選手の座をとられ、苦しむ3年生の姿を描いた。そして3作目は、精一杯努力しながらも成績が伸びず、なげやりになり始めた奈美や真弓のために、同じような境遇の子が書いた日記風にしたりした資料を作成した。

こうした実践を通して、私は次のような問題点をとらえることができた。

- ① 生徒の実態を把握した教師自身が作成するのであるから、生徒の本音をひき出しやすい利点もあるが、教師の描く理想が前面に出やすく、押しつけになりやすい点は注意しなければならない。
 - ② じっくりと腰をすえて何度も推こうするゆとりがないので、どうしても叙述に不明瞭な点や現実とかけ離れた部分が出てくる。そうしたことに気づくのが、どうしても生徒に一読させた後になってしまう。
 - ③ 資料づくりの段階で考慮しなければならないこととして、論点が明確に設定できているか、生徒の生活にかえてふりかえらせる場が的確に設定されているか、生徒が話しやすい距離感が教材に保たれているか、という3点をあげることができる。
 - ④ 道徳の授業が成立する最大の条件は、学級づくりができているかどうかという点である。学級づくりが軌道にのっていなかった1作目、2作目の指導では、やはり生徒の本音をひき出すことができなかった。
- この4点を反省し、次からの実践に役立てていきたいと考えている。

(水野達彦)